EternalStar 4

エターナルスター

Chika & Yuki

綾瀬麻結

Mayu Ayase

EB

エタニティ文庫

第一章　艶めく宴の果てに

――十一月下旬、大阪。

天高く馬肥ゆる秋。暦の上では冬になり、紅葉の葉は徐々に鮮やかな赤い色に染められて、情緒あふれる風景へと変わり始めていた。

今はまさに、絶好の行楽シーズン。本格的に冬将軍が到来する前に、日本の秋を五感で楽しもうと計画している人が多いのだろう。

まだ朝の六時だというのに、大阪駅構内は、高速バスターミナルに停まっている観光バスに向かうグループや、お洒落な登山服を身に付けた女性たちで賑わっていた。出勤するサラリーマンや、夜勤明けで帰宅する人よりも、行楽客の方が多いように見える。

水嶋グループ大阪支社秘書室に勤務する鈴木千佳は、その光景に口元を綻ばせた。一泊用の小さなキャリーバッグを引き、貴重品が入ったショルダーバッグを斜め掛けにしている千佳も、その人たちと同じように心が浮き立っていたからだ。

カフェ内の柱に貼られた鏡がガラス越しに目に入ると、千佳は一瞬足を止めた。胸元

がV字にあいた白のプルオーバーセーターに、黒のダウンジャケット。黄土色のコーデュロイ生地のハーフパンツにトレンカ型のタイツ、そしてヒールのないウエスタンブーツを履いた自分の姿が映っている。千佳が普段好んで着る服とは全く違って、若者らしい格好だった。

ファストファッションのお店に入るなり、高校生の妹の実佳が「お姉ちゃんは若いんだから、もっといろいろな服に挑戦しなくっちゃ。いつもの服も大人っぽくていいんだけど、今回は……ね」と言って見立ててくれたのがこの服だった。

最初はこんな色合いの服ではなく、原色に近い服を次から次へとカゴに入れられた。派手な色の服は着ない千佳が、すかさず元の場所に戻す。そのたびに、妹は肩を落とし、ため息をついた。

結局、お互いが妥協し合って今着ている服に落ち着いたが、千佳は家を出る前から着慣れた服に着替えたくてどうしようもなかった。不思議なことに、環状線の電車に乗ったころからあまり気にならなくなったが。

慣れって必要なのかもね――と苦笑いを浮かべ、再び歩き出そうとしたとき、ショルダーバッグに入っている携帯が突然鳴り出した。急いで携帯を取り出して、液晶画面を確認する。そこに表示されている名前を確認した瞬間、千佳は頬を染め、口元を綻ばせた。

「もしもし」

『俺だ』

「ええ、わかってる」

機械越しとはいえ、まるで耳元で囁かれているように感じ、千佳の躯は喜悦からブルッと震えた。誰も見ていないのに、恥ずかしさを隠すように俯いて甘いため息をつく。ここがどこなのかわかっているのに、甘美な電流がお尻から脳天へと突き抜け、千佳はその心地よい波に、もっと浸りたくなってしまった。

一ヶ月前からずっと会っていない、身も心も捧げている彼氏からの電話となれば、躯が疼くのも当然かもしれない。

東京で暮らす恋人の水嶋優貴とは、現在遠距離恋愛中。元々東京で働いていた千佳が大阪へ出向し、優貴と遠距離恋愛をすることになった原因は千佳にあった。

大阪に住む両親が入院したことを知った千佳は、優貴に相談しようともせず、一人で悩み、勝手に大阪支社への転勤願を提出してしまった。その大阪支社には、千佳に好意を寄せている茂庭慎太郎がいると知っていたのに。

結果、千佳が初めて心を許し、全てを捧げるほど愛した優貴から別れを告げられた。それが、今年の初夏のことだった。

優貴は水嶋グループの御曹司の一人。将来は、どこかの令嬢を妻にする。いつの日か別れの日が訪れると思っていた。だから、その時期が思っていたよりも早くなっただけ

だと、千佳は自分に言い聞かせていた。

でも、彼の子供を子宮外妊娠で失い、悲しみから逃れるように茂庭と付き合ったことで、千佳は初めて心の奥に閉じ込めていた自分の気持ちに気付いた。

優貴のことを、心から愛していることを……

だからこそ、優貴にヨリを戻したいと言われても、千佳は頷けなかった。〝傍にいられるだけで幸せ〟とは、もう思えなかったから。未来の妻のもとへ歩いていく優貴の後ろ姿を、笑顔で見送ることなんて絶対にできないと。それならば、今、離れた方がいいと思って、復縁を迫る優貴を二度も拒んだ。

彼を愛する気持ちがある以上、どうあがいても逃れられないというのに……

『今日出発だっただろ？　もう集合場所にいるのか？』

優貴の声に込められた今までにない優しさが、千佳の心へと伝わってくる。

「……ううん。まだ大阪駅の構内よ」

再び優貴と付き合うようになり、今まで自分を縛っていた心の枷を取っ払ってからというもの、彼は傲慢な態度を取ることをやめ、真綿で包むように優しく接してくれるようになった。優貴の態度がこれほどまでに変わるとは千佳は、想像もしていなかった。

今の付き合い方は、以前とは全く違う。千佳との未来を考えている……と彼がはっきりと口に出してくれたから？　だから、千佳に頻繁に連絡を入れてくれるようになった

のだろうか？

優貴が示してくれる愛情に、千佳の口元がさらに綻んだ。

「集合時間まであと十五分ぐらいあるけど、もう行っておこうかなって思ってるわ」

『そうだな』

千佳が所属している秘書課は、今日から社員旅行だった。一泊二日で、群馬県の草津温泉へ行くことになっている。そのことを優貴に話したのは二週間も前なのに、出発する時間まで覚えていてくれたなんて信じられなかった。ほんの些細なことなのに、嬉しくて堪らない。

「……本当だったら、優貴と一緒に旅行へ行きたかった」

心に秘めておくことができず、思わず本音を漏らす。吐露した途端、恥ずかしさを覚えて、千佳は頬を染めながら視線を落とした。

そのとき、左手の薬指にあるリングが目に入った。将来を誓い合った証として贈られたエンゲージリングを見るだけで、彼への想いが熱い炎となって燃え上がる。

素直な気持ちを表に出すと、優貴は喜んでくれる。だから、何も恥ずかしがることはない。

自分の気持ちに軽く頷いたとき、彼の声が聞こえた。

『千佳……、俺も同じ気持ちだ』

もどかしい気持ちを感じさせるように、優貴の声は掠れていた。
「そう言ってくれるなんて、わたし……とっても嬉しい」
気持ちを告げるだけでは物足りない。優貴の男らしい大きな手を掴むように、千佳は携帯をギュッと握り締めた。真珠を抱えた天使のストラップが反動で揺れて、千佳の手の甲を軽く叩いてくる。〝いつまでイチャイチャしているの！〟と伝えるかのように。
千佳は忍び笑いを漏らして、構内から少し明るくなった外へ視線を向ける。そろそろバス乗り場へ行かなければならない。だが、その前に一つだけ優貴に訊きたいことがあった。
「ねえ。優貴の予定なんだけど、今日は名古屋だった？」
『いや、急遽東京で仕事をすることになった。何故だ？』
いきなり優貴のスケジュールを訊いたので、きっと不審に思ったのだろう。問い質すような優貴の声音に、千佳は背筋をピンッと伸ばした。
「ううん、訊いてみただけ。気にしないで」
訊いてしまったことを少し後悔していると、今度は優貴が千佳の機嫌を伺うように静かに口を開いた。
『宿の変更はないな？　……〝彩の庭〟でいいんだな？』
どうしてそんなことを訊くの？　――と不思議に思いながらも、千佳はゆっくり頷いた。

「ええ。新幹線で一度東京へ出るか、それともバスにして宿をグレードアップするか、秘書課内で多数決で決めたぐらいだもの。そう簡単に変更はできないと思うわ」
『わかった。……じゃ、社員旅行を楽しんでこい』
「うん、楽しんでくるわ。……あっ、待って！　明後日の二十三日だけど、大阪で会えるのよね？」
千佳が大阪へ戻ってくる二十二日は無理だけど、その翌日は会えると優貴は言ってくれた。そのことを、もう一度確認しておきたかった。
『ああ。……大阪へ行く』
その答えに、千佳はホッと胸を撫で下ろした。ショルダーバッグには、優貴が大阪で借りた賃貸マンションの合い鍵が入ってる。二十二日は自宅には戻らずに直接マンションへ行って、翌日に彼が来るのをそこで待つ予定だった。もちろん、そのことは優貴には内緒だ。
「じゃ、今日もお仕事頑張ってね」
まるで愛を囁くように優しく言うと、千佳は通話を切った。
「さあ、遅れないように集合場所へ行かないとね」
携帯をショルダーバッグに入れると、キャリーバッグを引っ張って、千佳は集合場所

となっているバス乗り場へ歩き出した。

進んでいくうちに、大型バスが何台も停車しているのが見えてきた。秘書課に割り当てられたバスは四号車と五号車で、秘書室は五号車となっている。五号車の乗降口に立ち、手に紙を持って出欠の確認をしている女性は幹事の一人、入社四年目の門倉絵里奈だった。

千佳の姿を見るなり、門倉は元気良く手を上げて微笑む。胸まで届く茶色い巻き毛が、軽やかに揺れた。

「おはよう！　昨日の雨が嘘みたいにいい天気になりそうね。本当に旅行日和だわ」

「楽しく過ごせそうですね」

トランクルームに荷物を積んでいるバスの運転手にキャリーバッグを渡すと、千佳は門倉に向き直った。彼女は「早く源泉かけ流しの温泉に入りたいわ」と言いながら、うっとりした表情を浮かべている。その表情につられて、千佳も思わず温泉に浸かるところを想像してしまい朗笑を零した。

二人とも同じ気持ちですね――と門倉に笑みを向け、千佳はバスのステップに足をかけようとした。だが、一度上げた足をゆっくりと地面に戻すと、システム開発部技術課の社員たちに割り当てられている三号車のバスに目を向けた。

水嶋グループの社員旅行は、リストアップされた旅行先から部署ごとに行き先を選べ

るシステムになっており、秘書課は十数件もの候補地の中から草津温泉を選択した。システム開発部技術課も同じ場所を選んだため、二つの部署は同じ日程で社員旅行へ行くこととなったのだ。

つまり、ほんの数週間だけ付き合った茂庭慎太郎も一緒ということになる。

候補地は他にもたくさんあるのに、まさか同じ草津温泉になるとは思ってもみなかった。

これでは茂庭と、必ずどこかで顔を合わせることになる。宴会や、自由時間で……

茂庭とはきちんと別れているけれど、優貴との恋を応援してくれた彼には、優貴と復縁できたことを伝えておくのが筋というものかもしれない。それだけではなく、茂庭を左遷に追いやった優貴の行動も謝り、彼が本社へ戻れるように尽力すると伝えなければ……

「ちょっと鈴木さん！　早く入ってよ。出発が遅れるでしょ！」

ハッと我に返り後ろを振り返ると、ベリーショートで背の高いもう一人の幹事、佐々木唯子がいた。

「ご、ごめんなさい！」

門倉は温和で人当たりがいいけれど、門倉と同期の佐々木は気性が激しいので、あまり怒らせない方がいい。千佳はもう一度彼女に謝ってからバスに乗り込み、既に着席し

ている先輩たちに朝の挨拶をしながら、指定された座席へ向かった。
「おはようございます」
窓際の席に座る北川鮎美（きたがわあゆみ）に挨拶をし、千佳はその隣に腰を下ろした。彼女とは同期で、水嶋グループの新入社員研修で何度か話したことがある。特に仲がいいというわけではないけれど、今回は同室なので一緒に過ごす時間が多くなるだろう。
「聞こえてたよ。鈴木さん、佐々木さんに怒鳴られてたね」
北川がクスクス笑うと、緩やかなパーマをかけた肩までの髪が軽やかに揺れた。大きな瞳をクルッと回転させる北川に、千佳は苦笑いを浮かべる。
「この二日間、佐々木さんの気分を害さないように努めます」
「わたしもそうする！」
力強く頷く北川に笑みを向けてから、千佳はショルダーバッグを膝に置いた。
バスのドアの閉まる音が車内に響く。エンジンのかかる音が聞こえたと思ったらバスはスムーズに発車し、バスガイドからマイクを受け取った門倉が立ち上がった。
「おはようございます、幹事の門倉です。出発時間までまだ数分ありましたが、システム開発部技術課の皆さんも揃っていましたので、今から出発します！　到着するまで、想像しているよりも長いと思いますが、車内でも楽しく過ごせたらと思っています。では、今から朝食のサンドウィッチとジュースを配ります」

門倉はマイクをバスガイドに手渡すと、佐々木と共に朝食を配り始めた。
「おはようございます。本日は、近畿観光バスをご利用くださり誠にありがとうございます。運転手の松木（まつき）、わたしバスガイドの上田（うえだ）が群馬県草津温泉までご一緒させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします」
バスガイドと運転手に向けて、拍手が起こった。
「今回は約七時間かかる長距離移動です。バスの振動で酔われて気分が悪くなられたり、急を要することも起こるかと思います。そんなときは、遠慮なくおっしゃってくださいね。さて、このバスは名神高速に入って一路群馬県へと向かいますが、今日は朝が早かったので、眠たい方もいらっしゃると思います。八時三十分まで、どうぞゆっくり過ごしてください」
バスガイドの上田が頭を下げると、もう一度拍手が起こった。その拍手がまばらになったころ、千佳と北川の手元に、大阪駅構内にあるカフェの手作りサンドウィッチとジュースが届いた。
「ここのクラブハウスサンドウィッチ大好きなの！　ちょっと食べて、寝よっか」
「ええ、そうしましょう」
北川の意見に賛成すると、彼女に続いて千佳もウェットティッシュの包みを開けて手を拭（ぬぐ）う。

初っ端から佐々木に怒られることになってしまったが、千佳の気持ちはもう草津温泉に向いていた。バッグに入った手作り地図を思い出しながら、千佳は鶏の照り焼きが挟まれたサンドウィッチを一口頬張り、溢れ出る肉汁の旨みに感嘆の声を漏らした。

このとき、草津温泉で起きる出来事がきっかけとなって、これからの一年が大変なことになるなんて、千佳は想像すらしていなかった……

――群馬県草津温泉。

「う～ん！」

バスから降りると、凝り固まった躯をほぐすように、千佳は大きく伸びをした。立ち寄ったサービスエリアでも躯を動かすようにしていたけれど、やっぱり約五百キロメートルもの距離をバスで移動するのは少々こたえる。深夜の高速バスに乗り慣れているから大丈夫だと思っていたのに。千佳は自分の体力のなさを情けなく思い、長いため息をつきながら小さく頭を振った。そのとき、トランクルームから自分のキャリーバッグが出てきた。

運転手の松木にお礼を言ってそれを受け取ると、千佳は改めて周囲を見回した。

建物の間からモクモクと立ち上がり、天高く上昇していく湯気。深呼吸をするように、鼻でその空気をいっぱい吸い込むと、想像していたとおり硫黄の臭いが鼻腔を刺激した。

温泉地らしいその臭いに、興奮を掻き立てられる。

冷たい風が頬をなぶっていく。まだ冬本番ではないというのに、千佳は両手で躯をかばいたい衝動に駆られた。だが、日陰から太陽の暖かな陽が射し込む場所へ移動すると、春の陽だまりのようにぽかぽかとしている。

湧き立つ興奮を抑えきれないまま、千佳は湯宿〝彩の庭〟へ視線を向けた。

今日泊まる予定の宿は、五階建ての近代的な和風旅館。建物は柔らかな雰囲気が漂い、訪れる人々を優しく迎えてくれているように見える。創業してから数年とまだ新しいが、贅を尽くした癒しの宿として人気があり、団体の予約は取りにくいと先輩秘書が話していた。岩造りの露天風呂は源泉掛け流し、他にも大浴場や二十三種類のお風呂、さらに全客室に天然温泉の露天風呂が付いているとなれば、人気が出るのも当然だろう。

（こんな素敵な宿で、わたしも優貴と二人っきりで過ごしたいな）

大胆な夢が浮かび、千佳は含み笑いを漏らした。

最近の千佳は、昔ほど節約主義者ではなくなっていた。節約できるところは節約し、興味を抱いたものは自ら進んで体験するようにしている。そうすることも、人生では大切なのだと気付いたからだ。

こんな風に考えられるようになったのは、千佳が抱えていた重荷を優貴が全て背負ってくれたからだった。

父の交通事故のことを知ると、優貴はまるで自分の家族のように鈴木家を心配して、交通事故対応に詳しい弁護士を手配してくれた。知らず知らずに蓄積されていたストレスと疲労感。精神的にも肉体的にも重なっていった疲れは次第に隠せなくなり、両親だけでなく千佳の表情にまで表れるようになっていた。

だが、事故の件を全て弁護士に任せると、家族の顔色も徐々に明るくなっていき、笑顔も戻った。肩から力が抜けて心に余裕が生まれると、優貴との未来のために自分磨きをしたいと強く思うようになった。

見るもの、聞くもの、体験できるものは、何でも興味を持って楽しもうと……

「鈴木さん、中に入ろう」

瞳をキラキラと輝かせながら〝彩の庭〟を見ていた千佳は、すぐに北川の方へ向いて軽く頷いた。

「ええ、入りましょう！」

北川に向かって走り出そうとしたとき、千佳の視界に茂庭の姿が目に入った。千佳が気付く前からこちらを見ていたのか、彼のその表情には愁色（しゅうしょく）のようなものが浮かんでいる。だが、千佳と目が合うと、茂庭は笑顔で手を振ってきた。思わず手を振り返したものの、自分が原因で左遷となってしまったことがしこりとなり、微笑み返すことができない。

できるだけ早く謝らなければ――と思いながら、千佳は彼の視線から逃れるように北川へ走り寄った。

仲居の挨拶を受け、エントランスを通り抜ける。目の前に広がるメインロビーに圧倒されながら、フロントから少し離れたところに並べられたソファへと向かった。先輩や上司たちを押しのけてソファに座るわけにもいかないので、カウンターテーブルでホットドリンクをもらった。

「あっ、入ってきたわ！」

北川が、いきなり興奮したような声を上げた。誰を見てそんなに嬉しそうにしているのか興味を抱いた千佳は、彼女の視線の先を目で追った。

そこにいたのは、インテリ風の若い男性の集団。まっすぐに前を向き、堂々と歩くその姿から、彼らが自分に自信を持っているということが伝わってくる。

「……彼らが、システム開発部技術課の人たち」

千佳が呟くと、北川は彼らから視線を外し、嬉しそうに頷いた。そして、意味ありげに千佳の左手にあるリングを指す。

「鈴木さんは彼氏がいるから興味ないと思うけど、今日はカップルがいっぱい誕生すると思うわ。わざわざあちらと仕組んだんだから絶対よ」

「えっ？　あちらと仕組んだってどういう意味なんですか？」

「もしかして、知らなかった？」
何の話をしているのかさっぱりわからず、千佳は問いかけるように小首を傾げる。すると、北川は内緒話をするようにさらに側へ近寄ってきた。
「実はね、秘書課って支社内では人気があるのよ。女子社員が私服着用を認められてる数少ない部署の一つだしね。で、こういう社員旅行はコンパにはもってこいの機会だから、システム開発部技術課から行き先を同じにしないかという申し込みがあって実現したというわけ」
コンパという言葉に、千佳は思わず口をポカンと開けた。
「東京本社ではそういうことはない？」
「なかったと思います……。わたしが知らなかっただけかもしれないけど」
ソファにふんぞり返っている妻帯者の上司たちは別として、その他の独身社員たちは皆、今回の社員旅行がどういう目的なのかわかっているのだろうか？
「わたしは、この機会を利用して絶対に彼氏を作るわ！　だって、相手はシステム開発部の男性だもの。付き合った彼が、もし企業にとって利益に成り得るものを開発するグループにいたら……。ああ、どうしよう。凄いドキドキするわ！」
「そ、そう。……頑張ってください」
ありきたりな言葉しか返せなかったが、北川は特に気にしていないようで、千佳の言

葉に嬉しそうに頷く。
「だからね……」
そこで声のトーンを下げると、北川は顔を寄せてきた。
「今夜、同室の門倉さんと佐々木さん、そしてわたしが部屋に戻ってこなくても、鈴木さんは何も心配しなくていいからね」
北川の言葉に妙な生々しさを覚え、千佳の頬は上気して熱くなった。秘書室の先輩も北川と同じ気持ちなのかと思うと、視線を向けられなくなってしまう。目のやり場に困った千佳は、幹事の二人がそれぞれのテーブルを回って、宿泊カードに書き込んでもらっては鍵を渡すという作業を眺めるほかなかった。
それから三十分後。上司たちが次々と部屋へ向かっていき、社員でいっぱいだったロビーも静かになったころ、門倉と佐々木はやっと千佳と北川のもとにやってきた。
「お疲れさまです」
朗らかな笑みを向ける北川に、門倉と佐々木は大げさにため息をつく。
「まだちょっとしか仕事をしていないのに……、もう嫌になってきたわ」
唇を尖らせたかと思うと門倉は諦めたように肩を竦め、宿泊カードと万年筆を千佳たちの前に置いた。佐々木が部屋のカードキーをその横に置く。千佳たちは、急いで自分の名を書き込んだ。

「さあ、わたしたちの部屋に行きましょう」
本館の二階には宴会場を兼ねた大広間がいくつもある。別館は客室になっていて、三階と四階はスタンダードとデラックス、五階はデラックススイートとスペシャルスイートとなっているようだった。当然上司たちは五階を割り当てられ、秘書室や技術課の社員は三階と四階に振り分けられたが、幹事たちは毎年課長クラスの部屋を割り当てられることが決まっていた。忙しく立ち回るその労をねぎらうためらしい。
エレベーターを五階で降りる。そこには一階のメインロビーとはまた違った異空間が広がっており、千佳は思わず息を呑んだ。広い廊下の両側には小石が敷き詰められており、間接照明が温かな雰囲気を醸し出している。部屋へ入るには、小石の上に架けられた小さな太鼓橋を渡るようになっていた。
千佳は、ふと名古屋の割烹料亭を思い出した。何も知らずに資料を届けに行った先で優貴に会い、さらには別室へ連れていかれて奔放に愛し合ったあの日のことを。そのときの雰囲気とあまりにも似ていたので、当時の記憶が鮮明に蘇り、千佳の心臓はドキドキし始めた。
思わず視線を周囲に走らせる。どこかの部屋から、いきなり優貴が飛び出してくるのではないかと思ってしまったからだ。
そんなこと、あるわけないのに――と自分を笑って肩を竦めると、千佳は三人に遅れないように早足であとに続いた。
角を曲がったところで、秘書課の上司たちとすれ違った。振り返りながら「もう温泉に入るのね」と羨ましそうに呟く北川。そんな彼女の横顔をにこやかに見ていると、門倉と佐々木が小さな太鼓橋を渡った。〝蓮の間〟と表札がかかっている。
門倉が脇にある機械にカードキーを通し、カラカラと音を立てて引き戸を開けた。広い玄関の向こうにドアが一つ見える。靴を脱ぐと、そのドアを開けて室内に入った。
「うわぁ～！」
目の前に広がる部屋に、それぞれが感嘆のため息を漏らした。二十畳ほどの空間には、独立した和室スペース、二つのセミダブルベッド、そして応接セットが設えてある洋室スペースがあった。和室にある大きなガラス戸の向こうには、部屋付きの露天風呂が見える。既にお湯が湯船を満たしていて、すぐにでも入れそうだ。暗くなれば、宝石のように輝く草津温泉の街を眼下に見ることができるだろう。
「それじゃ、ここからは別行動ね」
当然のように、ベッドのサイドボードに私物を置く先輩たち。北川が千佳に視線を向けて、目をぐるりと回転させる。そんな彼女に苦笑いを返したが、千佳は普段から布団で寝ているので特別不満はなかった。和室の隅に自分のキャリーバッグを置く。
「ねえ、鈴木さんはこれからどうする？」

千佳にならって、北川も隣にキャリーバッグを置いた。
「今夜の宴会は十九時でしたよね。それまで、温泉街を回ることにします。北川さんはどうしますか？」
「もちろん、温泉に入って……肌をスベスベにするわ。鎖骨を見せて色っぽく、さらに頬を上気させて好きな男性を射止めるの！」
そこまでして射止めたい男性が誰なのか知りたくなったが、千佳は詮索するような真似はせずに「頑張ってくださいね」と告げた。
荷物を片付けているうちに、いつの間にか幹事の二人は部屋からいなくなっており、北川も宿専用の浴衣と綿の入った暖かそうな半纏を持って「じゃあね」と言って出ていった。千佳もショルダーバッグを手に取り、斜めに掛ける。
「さあ、わたしはわたしで楽しもうかな」
時刻は既に十五時前。早く行動を起こさないと、時間がなくなってしまう。急いでカードキーをバッグに入れると、千佳は部屋をあとにした。

宿から大通りへ出ると、千佳は町内を巡回しているワンコインバスの乗り場に向かった。幸せそうな親子連れ、楽しそうにしている友達同士、寄りそって歩くカップル。多くの人たちが千佳の視界に入っては通り過ぎていく。

そんな微笑ましい光景を見ていると、急に物悲しい気持ちが湧き起こってきた。千佳のように、一人っきりで行動している人など、どこにもいない。皆、誰かと楽しそうにしている。
「わたしの隣にも優貴がいてくれたら……」
最後に優貴と会ってから、まだ一ヶ月ほどしか経っていないのに、彼に会いたくて堪らない。東京で暮らしていたときは、一ヶ月に一度でもデートができたらいい方だったのに。
我慢しなさい、明後日には優貴と会えるんだから！
叱咤するように自分に言い聞かせる。何か楽しいことを考えようと思い、優貴と再会してからのことを考えた。
彼のために何をするのか考えただけで千佳の口元は自然と綻び、頬はチークをのせたようにどんどんピンク色に染まっていく。人には言えないことを想像しながら歩いていると、すぐにバス停に着いた。数日前に下調べしておいた草津温泉についてのメモを取り出し、行きたい場所を確認する。
しばらく待っていると、まるで大正時代を舞台にしたドラマや映画に出てきそうなレトロなバスがやってきた。全体的に濃い紺色をしているが、天井や窓枠は黄色く塗られていて、思わずワクワクしてしまいそうなぐらい可愛いバスだった。

ドアが開くと、千佳はまず運転手に声をかけた。
「すみません、鶴太郎美術館入り口に停まってもらえますか？」
宿のエントランスに置かれていたバスの時刻表には、片岡鶴太郎美術館には停まらずに通過することもあると書いてあったので、先にお願いしておいた方が無難だと思ったのだ。
「わかりました」
「ありがとうございます！」
空いた席に座ると、千佳は窓の外を流れる温泉街の景色に目を向けた。ホテルや老舗旅館が目に入ったかと思えば、お土産屋や飲食店が軒を連ね、その前を人々が楽しそうに行き交っている。バスに乗ってから十数分、見るもの全てに興味を抱いていると、鶴太郎美術館入り口でバスが停まった。
「ありがとうございました」
お礼を言って、バスから降りる。
「え～と……」
草津温泉街の地図を取り出して、どの方向に〝西の河原公園〟があるのか確認した。しゃくなげ通りの先に、バス停の名前になっている草津片岡鶴太郎美術館があり、さらにその奥へ行けば目的地の西の河原公園に行けるようだ。千佳は、足取りも軽やかに歩

き始めた。
数分後、目の前に〝西の河原公園〟の入り口が見えた。公園へ通じる石畳は豊かな自然に囲まれ、その傍らにある温泉が流れている湯川からは、モクモクと湯気が上がっている。
「ここに温泉の源泉があるのね」
観光している人たちの間を縫うように、千佳はさらに進んだ。至るところに温泉が湧き出ていて、ごつごつした岩に囲まれた湯だまりは〝瑠璃の池〟や〝琥珀の池〟と名を付けられている。
そして、公園内でもっとも目立つ源泉〝鬼の茶釜〟が目に飛び込んでくると、千佳は感嘆のため息を漏らした。摂氏五十度以上の源泉が湧き出しているので、湯面から湯気が立ちのぼっている。名称が入った立て札がフレームに入るように、千佳は携帯のカメラで写真を撮った。
メールを立ち上げ、一言「温泉が生まれる瞬間よ」と打ち込むと、写真を添付して優貴に送信した。
忙しくしていると思うけれど、これでちょっと肩から力を抜いてくれたら……
優貴のことを想いながら携帯をバッグに入れると、千佳はすぐ側にある草津穴守稲荷神社へ向かった。ここには白砂が入ったお守りがあるらしい。とても珍しいので千佳も

買おうと思っていた。

たくさんの鳥居が並ぶ階段を上りきると、お社へ行き、お賽銭を入れた。家内安全、病気平癒、そして優貴の厄除けをお願いすると、その隣にある建物で目当てのお守りを購入する。

ふと空を見上げると、陽はだいぶ西に傾いていた。東の方角から闇が迫り、冷たい風が吹いてくる。時間を見ると、十六時十五分を過ぎていた。

「やっぱり、間に合わなかったか……」

肩を落とすものの、千佳は次の場所へ向かうために再び長い階段を下り始めた。本当は、湯もみショーや時間湯が体感できる〝熱の湯〟にも行きたかったけれど、明るいうちに〝西の河原公園〟へ行きたかったので、後回しにしたのだ。なんとか最終受付の十六時三十分までに行けたらと思っていたが、残念ながら諦めなければならないようだ。

「仕方ないわよね。……あっ、待って。もしかして明日一番のショーなら見学できるかも。出発は十時三十分だから、間に合うかもしれない」

朝風呂もいいけれど、温泉は今夜たっぷり堪能すればいい。せっかく群馬県まで来たのだから、有名な草津の湯もみは見て帰るべきだろう。

明日の予定を、頭の中で組み立てる。上手くいきそうだと思った千佳は、口元に笑みを浮かべながらさらに公園の奥へと歩き出した。

明治時代に草津を欧米に広く紹介したベルツ博士とその同僚のスクリバ博士像を通り過ぎ、さらにあずまやも過ぎる。すると、最終目的地の〝湯の滝〟が目の前に現れた。豪快に滑り落ちる湯は圧巻だった。

携帯を取り出して、再び写真を撮る。

「何回お風呂が入れるかしら……」

千佳の独り言は隣にいた老紳士にも聞こえたようだ。彼は肩を揺らして、笑い声を上げる。

「ワシもそう思ったよ。これほどの湯があれば、躯が泥まみれになっても、服が真っ黒になっても、母親は怒らなかっただろうな……とな」

独り言を聞かれた恥ずかしさから頬が熱くなるのを感じながら、千佳はその老紳士に微笑みかけた。

「今すぐにでも、お湯の量を気にせずゆっくりとお風呂に浸かりたいものです」

「じゃ、今夜はゆっくり温泉に浸かって、日頃の疲れを癒しなさい」

「はい。では……」

携帯を開き、〝滝の湯〟の写真を優貴に送る。「昔も今も変わらない。同じなのね……」とコメントを打ち込みつつも、隣にいる老紳士が何故か妙に気になった。顔見知りでもなければ、親戚でもないはず。どこかでお会いしませんでしたか……なんて言葉をかけ

られるはずもなく、千佳は何も言わずに来た道を戻り始めた。

〝西の河原公園〟をあとにすると、千佳はしゃくなげ通りから西の河原通りへと入った。草津のメインストリートといわれるこの通りを、そのまま三百メートルほど進めば、あの有名な湯畑に辿り着く。

宴会が始まる十九時までには、まだたっぷりと時間があったので、立ち並ぶ商店をゆっくりと見ながら湯畑へ向かおうと決めた。

そのとき、千佳の目に〝草津ガラス蔵〟という看板が飛び込んだ。すかさず店に入り、光に照らされて輝くガラス細工のアクセサリーを眺める。

「とっても綺麗……」

色鮮やかな黄色と緑色で作られたトンボ玉のピアスを自分用に、赤色のトンボ玉と同色系の組み紐の携帯ストラップを妹のために購入することにした。レジでお金を払って包んでもらうと、千佳は再び外へ出て、散策を始めた。

木の温もりを感じさせるお店の前をそぞろ歩きしていると、今度は小腹が空いてきて食べ物ばかりが目に入ってくる。串に刺した鮎や海老が炭火で焼かれていて、とても食欲をそそる匂いがした。その隣の甘味処からは、甘い匂いが漂ってくる。

少し立ち寄ってみようかな――と思っていると、風に乗って醤油の香ばしい匂いが千

佳の鼻腔を擽った。一瞬でそちらに目を奪われた千佳は、匂いに誘われるように歩き出した。串にさされているその姿は、明らかに焼き鳥。だが、それは違っていた。鶏の串焼きに見えたものは、秘伝のタレで味付けされたぬれおかきと書いてある。七味やゴマ、マヨネーズなどをトッピングされたものもあり、見ているだけで唾が出てくるほど美味しそうだった。

「ゴマ味を一つください」

千佳は、思わず一つ購入してしまう。

「ありがとうございます」

店員から受け取ると、千佳は歩きながらそれを一口かじった。

あまりの美味しさに足が止まり、千佳の口元に笑みが浮かぶ。さらにもう一口かじって柔らかいぬれおかきに舌鼓を打つと、千佳は再び歩き出した。前方には、あの有名な湯畑が見えていた。心を弾ませながら、どんどん歩を進める。

時刻は既に十七時を回っている。陽も落ちて暗くなった街に、ライトアップされた湯畑が美しく浮かび上がっていた。

「うわぁ～、なんて幻想的なの！」

流れ落ちる湯に、ライトが反射してキラキラ輝いている。ゴミ箱に串を捨てて、バッグに入れていたウェットティッシュで指を拭うと、千佳は当然のように携帯で写真を撮

った。

優貴には「とてもロマンティックよ。一人なのがとても残念だわ」とコメントを添え、実佳には「とっても綺麗でしょ」と添える。そして、今でも仲良くしている東京本社秘書室の桜田菜乃には「何でも話せるようになってから……一緒に社員旅行へ行きたかった」と打ち込んで、メールを送信した。

携帯をバッグに入れると、千佳は湯畑の周囲を歩き始めた。観光客も湯畑に見入ったり、お土産物屋に入ったりと思い思いに過ごしている。

千佳も心が浮き立ってきたとき、無料で楽しめる足湯処が目に飛び込んできた。観光客のカップルがちょうど席を立ったので、千佳はその場所にお邪魔することにした。ブーツを脱いでトレンカを膝下まで捲り上げると、湯気が立ち上る温泉に足を浸した。冷え切った躯を芯から温めてくれるその心地よさに、口から思わず至福の吐息が漏れる。

そのとき、左隣に誰かが座った。特に気に留めずに足をゆっくり動かしていると、いきなり「千佳?」と名前を呼ばれた。

「えっ?」

千佳のことを名前で呼ぶ人は数えるほどしかいない。驚いてすぐに隣へ視線を向けると、そこにいたのは、ほんの数時間前に宿で視線を交わした茂庭だった。

「茂庭さん！　どうしてここに?」

彼は苦笑いを浮かべ、千佳と同じように湯の中で足を揺らす。ジーンズを膝下まで上げているせいで、黒い脛毛が千佳の目に飛び込んできた。普段なら目にすることもない男性の脛を見て、彼ともう少しで親密な関係になりそうだったあの日のことが頭を過った。

ベッドに押さえつけられ、乳房に触れられて舌で舐められたときの感触を。

もう終わったことなんだから、思い出したりしないの！

必死になって自分に言い聞かせる。だが、一度思い出したそれはなかなか消えなかった。

「実は、千佳が一人で宿から出ていくのを見て、追いかけたんだ。でも、なかなか声がかけられなくて……」

「えっ、わたしを?　……どうして?」

口をポカンと開けて、茂庭の目を見つめる。

「いろいろと、話したかったんだ。あのあと、どうなったのか……きちんと聞きたかった」

茂庭は、千佳の左手薬指にあるリングを指す。

「これって、つまり上手くいったってことだよな?　彼にプロポーズされた?」

千佳は素直に頷いた。

「これからはケンカをしてしまっても、二人で乗り越えようって。結婚はまだ先の話なんだけど」

「そっか……。じゃ、俺はもう駄目ってことなんだな」
「えっ、何？」
声のトーンを下げてボソッと呟いた茂庭の声は、千佳の耳に届かなかった。訊き返すものの、茂庭は苦笑いを浮かべ、ただ頭を振るばかり。
「あ～あ。今夜、いいことないかな」
その言葉に、千佳はそっと茂庭の袖に手をかけた。
「ねえ、茂庭さん。あなたは知っていた？　今回の社員旅行は、秘書課とシステム開発部が……その……」
何と言えばいいのかわからず、千佳はもごもごと言葉を濁す。それを助けるように、茂庭がはっきりと言った。
「コンパになってるってこと？　ああ、知ってるよ。秘書課の女性は高嶺の花だし、俺たちシステム開発部も……いい部類に入ってると思う。自分で言うのもあれだけどさ……。まあ、お互いの課が示し合わせた結果がこれなんだから、別にいいんじゃないかな」
朗らかに笑う茂庭につられるように、千佳も口元を緩めた。
「わたし、実は知らなかったの。ここに着いてから聞かされてびっくりしたわ」
チラッと茂庭を見る。ここに座ったときと比べて、かなり肩から力が抜けているようだ。足湯のせいで躯が温まったのか、額にうっすら汗が光っている。手を後ろについているその姿は、だいぶリラックスしているように見えた。彼に謝るのなら今が一番いいだろうと思い、千佳は茂庭の方へ躯を向けた。

「ねえ、茂庭さん」
「うん？」
「わたし、茂庭さんに謝らなければいけないことがあるの。……優貴のことで」
不思議そうに千佳を見ていた茂庭は、優貴の名前に眉を訝しげに上に動かした。
「何？」
「茂庭さんを東京本社から大阪支社へ左遷させたのは、……優貴なの。ごめんなさい！」
頭を下げた千佳は、茂庭がびっくりしたように目を大きく見開いたことに気付かず、そのまま言葉を続ける。
「東京にいるころ、わたしが茂庭さんと食事に行ったのを知って、彼は嫉妬して……。権力を乱用するなんて、本当に信じられなかった。彼を罵ったわ。酷い人だとなじりもした。でも、わたしがいくらそう言っても、優貴の心を変えることはできなかったの」
面を上げ、縋るように茂庭に身を寄せる。
「優貴とは以前よりも深い絆で結ばれるようになったけど、それとこれとは別問題よ。わたし、茂庭さんが元の場所へ……、東京へ戻れるように優貴を説得するわ。何がなん

でもそうすると誓う。……ごめんね、本当にごめんね、茂庭さん！」
謝っても許されるものではないとわかっていたが、千佳はそうせずにいられなかった。
再び頭を下げる千佳の肩に、茂庭がそっと手を置く。
「千佳……、顔を上げて」
「でも、」
「いいから。さあ！」
強く押されて、千佳は顔を上げた。
「あいつを助けるのかと思うと、ちょっと複雑な気持ちだけど……千佳の心を軽くしてあげるよ」
表情を歪め、辛そうに千佳を見る茂庭。彼の目を見るだけで、胸が痛くなる。もう一度謝りそうになったとき、茂庭が口を開いた。
「千佳は、あいつが俺を左遷させたと思っているみたいだけど、それは間違いだ。そもそも俺は異動ではなく、千佳と同じ出向なんだよ」
「えっ？」
茂庭の言っている意味がわからず、千佳は眉根を寄せながら彼の真意を測ろうとした。
「俺の所属している技術課に出向の辞令が出たんだ。俺は、大阪での仕事も経験してみたくて手を挙げた。入社一年にも満たない俺が選ばれる可能性は低かったのに、その意

気込みを買われて俺が出向することになったんだ。三年という期間が終われば、俺は東京へ戻るんだよ」
「それって、つまり……」
茂庭が静かに頷く。
「あいつに左遷されたんじゃない。俺が自ら進んで大阪へ来たんだ」
躯から一気に力が抜ける。千佳は膝の上の掌に視線を落とした。
優貴は、権力を乱用していなかった。茂庭を左遷なんかしていなかった！　そんなことは露知らず、いったいどれほど優貴を罵ったことだろう。彼がそんなことをする人ではないってわかっていたはずなのに、優貴が立場を利用してそういうことをしたと千佳は決めつけていた。
視界がどんどん霞み、手の輪郭がぼやけていく。ふいに掌に焦点が合ったとき、千佳は自分が大粒の涙を零していたことに気付いた。
「千佳！」
千佳の肩を抱きしめ、茂庭はそのまま軽く撫でる。
「すまない。すぐに言っておけば、こんなに取り乱すこともなかったのに……」
茂庭の見当違いな言葉にも何も言えず、千佳は頬を伝う涙を拭いながらただ頭を振った。優貴を疑ってしまった自分が情けなくて涙が出たとは、告げることができなかった。

「ううん、大丈夫。……茂庭さんは左遷されたんじゃないって知ってホッとしたわ」
今この瞬間、千佳は優貴に会いたくて堪らなかった。会って……彼を傷つけたことを謝って、そして何もかも忘れて本能の赴くまま彼と愛し合いたい！
あと二晩も寝れば優貴に会えるとわかっているにもかかわらず、駄々を捏ねる子供のような感情が湧き上がり、千佳は思わず呻き声を漏らした。
そんな千佳の肩を、茂庭はまだ抱き続けている。そのことにやっと気付いた千佳が、どうやって彼から身を離そうかと悩んでいると、助け舟のようにバッグに入っている携帯が鳴った。その音に驚いたのか、茂庭の手が震える。千佳はさりげなく彼から身を離し、バッグから携帯を取り出した。
携帯の液晶画面に出ている名前を見て、千佳は泣きそうになった。今一番会いたい人、抱きしめたい人、側にいてほしい人の名前がそこに表示されている。
『もうすぐ会えるから、そのときに聞かせてくれ。千佳の心に残った風景を、俺も同じように感じたい』
たったそれだけしか書かれていなかったが、優貴も同じ気持ちでいてくれていると知って、千佳の心が高鳴る。携帯をバッグに入れようとしたその瞬間、再びメールの着信音が鳴った。今度は、二通も入っている。
『実佳もお姉ちゃんと一緒に旅行へ行きたいよ！　でも、お土産で我慢しておくね。いっぱいお風呂に入ってきてね』

妹からのメールを読み終えて切り替えると、もう一通は桜田からだった。
『とっても素敵ね！　いいな～、わたしは資料を抱えて走り回ってるのに（残業中なの）。今夜、飲みすぎないようにね。ほどほどのところで抜け出すのよ。上司にずっと付き合うことはないんだからね』
口元を緩めながら、携帯をバッグにしまう。
「友達？」
「ええ。本社の秘書室で親しくしてくれていた人と、妹から」
あえて優貴の名は出さなかった。茂庭は優貴を〝あいつ〟呼ばわりしている。つまり、今もそれほどいい感情を持っていないということだから、ここで出す必要はないと思った。
「そろそろ宿に帰るわ。浴衣に着替えたりしないとダメだし。茂庭さんはどうする？」
バッグからハンドタオルを取り出し、千佳は足湯から上がった。ピンク色に染まった足を軽く拭い、トレンカを下げて戻す。
「俺も一緒に戻るよ」
茂庭も足湯から出たが、タオルを持っていないようで、濡れたまま靴下を履こうとする。
「これ、濡れてしまったけど使う？」

今使ったハンドタオルを、おずおずと差し出す。千佳のその行動に、茂庭は目を大きく見開き、そして顔を真っ赤にした。

「えっ、いや……、その……ありがとう」

千佳からタオルを受け取ると、茂庭はまだ顔を赤らめたままで足を拭き始めた。どうしてそこまで赤面するのかわからなかったが、そんな彼を見ていたら、千佳も何故か恥ずかしくなってきた。

ブーツに足を滑り込ませ、バッグを斜め掛けにすると、千佳は立ち上がった。さりげなく茂庭に背を向け、火照(ほて)った頬にそっと手で触れて熱を冷ますそうと努力する。

「ありがとう、千佳。これ、洗って返すから」

「いいのよ！」

すぐに振り返り、片手を茂庭の前に出す。でも、茂庭はただ頭を振って、濡れたタオルをポケットに入れてしまった。その行動に唖然としながら、千佳は彼を見上げる。

これだけは譲らない――と告げるように、茂庭は千佳の目をまっすぐに見つめていた。何を言っても無駄だと感じ、千佳は仕方なく手を下げて肩を竦(すく)める。

「別にいいのに……」

ボソッと呟きながら足湯処から出ると、二人は肩を並べて宿へと向かった。

湯宿〝彩の庭〟は高台にあるので、湯畑からは上り坂になる。宿に戻る道中、茂庭と

いろいろな話をしたが、どれもとりとめのない話だった。

宿に着いたとき、千佳は心から安堵の息をついた。お互い気を遣い合ったような会話を、なんとか終わらせることができたからだ。

「じゃ、また宴会場でね」

茂庭は千佳の言葉に異を唱えることなく、ただ頷く。そんな彼に軽く手を振ると、千佳はエレベーターホールに向かって歩き出した。

「鈴木さん、そろそろ行こっか」

「はい」

浴衣(ゆかた)の袷(あわせ)に指で触れてから、千佳は北川と同じように湯宿の半纏(はんてん)を羽織った。カードキーと携帯、お財布、そして口紅とハンカチが入った小さなポーチを手に取ると、これから宴会が行われる大広間へ向かった。

茂庭と別れたあと、千佳は一度部屋へ戻り、その後一階にある源泉掛け流しの露天風呂を満喫した。肌がスベスベになった上に、躯(からだ)の内から温められたせいで血色も良くなり、チークをしなくても頬はピンク色に染まっていた。千佳だけでなく、大広間へ向かう女性社員たちも内から輝いて見える。男性社員の視線を集めているその光景を見ると、自分は無関係なのに妙にウキウキしてきた。

「そういえば、北川さんは……お目当ての男性社員と接触できたんですか？」
本館の二階にある大広間に足を踏み入れてから、千佳は訊ねた。
「ううん、それがね……館内を探したんだけど、彼はどこにもいなかったの。部屋番号もしっかりチェックしたのにね。でも大丈夫よ。彼のところへお酌しに行くから」
大広間には既に人が集まっていて、始まるのを今か今かと待っているようだった。仲居が、開始に間に合うようお酒を運び続けている。半纏を脱ぎながら周囲を見回すと、茂庭の姿が目に入った。楽しそうに同僚と話していたのに、千佳の視線を感じたのか、流れるようにこちらに目を向けた。まるで、千佳がそこにいると知っていたと告げるように、優しく笑みを零す。その表情にドキッとしつつも、千佳は笑みを張りつけて軽く頷き、秘書室の末席に座った。
「今、彼がわたしを見て微笑んでくれたわ！」
「えっ？」
北川が嬉しそうに千佳に擦り寄り、腕を強く叩いてくる。
「わたしが目をつけてる彼よ。技術部の茂庭さん」
茂庭の名前が出て、千佳はドキッとした。
「も、茂庭さん⁉」
「ええ、そうよ。もしかして、彼を知ってる？」

「……ええ、知ってます」
そう答えたものの、何かいけないことを隠しているように心臓がドキドキとしてきた。
「本当に？　やった！　わたしってなんてラッキーなの！　ねえ、お願い。彼に紹介して」
両手を合わせて、必死に頼み込む北川。親しいとまではいかないものの、普通に接してくれる彼女に向かってノーと言えるはずもない。
「ええ……」
そう言うしかなかった。
こういうとき、「たった数週間だけど、茂庭さんと付き合ったことがあるの」と言うべきなのだろうか？　それとも言わない方がいい？
既に終わった関係だから、わざわざ言う必要もないわよね。
自己完結させると、千佳は自分を落ち着かせるように深呼吸を繰り返した。
「えー。……皆様、もうお揃いでしょうか？」
スピーカーから流れる、幹事の門倉の声。大広間に響き渡ると同時に、ざわざわとした雰囲気も落ち着いてくる。これに乗じて千佳は北川から視線を逸らし、門倉と佐々木、さらにシステム開発部側の幹事の二人が立っている正面へと視線を向けた。
それぞれが自己紹介を終えると、次は秘書課代表者とシステム開発部代表者の挨拶があり、それから無礼講の宴会が始まった。

忘年会や新年会とは違うので社員の出し物は一切行われないが、宿側から草津温泉の見所、食事のあとに見てほしい場所、さらに宿の施設の紹介が始まった。その間、忙しく動き回る仲居たち。彼女たちが上司たちにお酌をしてくれるので、千佳はそのまま座って食事をいただくことにした。

旬の素材を活かした料理長自慢の和食膳に舌鼓を打ちながら、口当たりのいい日本酒を飲む。時間が経つにつれて、千佳は酔っていった。いつも身に纏っている見えない鎧が一つ、また一つと滑り落ちていく。会社ではいつも気を張り詰め、真剣な顔ばかりしているのに、このときばかりは聖女のように優しげな笑みを口元に浮かべていた。知らず知らずに匂い立つような艶っぽい仕草をしてしまい、茂庭だけでなくシステム開発部の人までもが千佳を興味津々に見つめてくる。

当然周囲の視線には気付かず、千佳は隣に座る北川へ目を向けた。日本酒を飲みすぎたのか、北川の目はトロンとしていて、流し目がとても艶っぽい。

「とっても綺麗だわ、北川さん」

「本当⁉　ありがとう！　茂庭さんも、そう思ってくれるかな？」

その言葉に、千佳は茂庭が座っている方へ視線を向けた。だが、茂庭は、残念ながらそこにはいなかった。

「ええ、きっと……」

綺麗な肌、真珠のように輝く白い歯、大きな目に表情豊かな口元。女性から見ても可愛らしい北川に告白されて、ノーと言える男性はそうそういないだろう。

酔っ払った人が増えてきたのか、話し声もだんだんと大きくなり、広間は騒然としてきた。多くの人がお目当ての男性や女性のもとへ行って話し始めている。即席のコンパをしようと、誘っているのかもしれない。

「やあ」

耳に届いたその声の主が誰なのか、千佳はすぐにわかった。正面を向くと、ちょうど千佳の目の前に彼が腰を下ろすところだった。

「茂庭さん」

意思表示するように、北川が千佳の大腿に手を載せる。

「これからさ……、俺を含めた技術部のやつら四人と飲みに行かないか？」

「行きたいわ！」

横から北川が身を乗り出し、茂庭に可愛らしい笑みを向ける。

「えっと、彼女は北川鮎美さんよ。わたしと同期なの」

茂庭は「それで？」と問うように、意味ありげに眉を上げる。千佳はそれには答えず、ただ苦笑いを浮かべた。

「わたしはもっと温泉に入りたいから遠慮しておきます。北川さんがきっと人数を合わ

せてくれるわ」
「ってことは、あと三人ね。任せて！」
足取りも軽やかに、北川は人数集めに向かった。残された千佳は、茂庭が何かを問う前にもう一度苦笑いを浮かべた。
「わたしのことは気にしなくていいから、皆で楽しんできて」
「千佳……」
「茂庭さんも言ったでしょ。これは一種のコンパなんだって。その場でただ飲むだけだとしても、わたし……もう優貴が嫌がることはしたくないの」
「彼はここにいない。千佳が何をしようと、誰にもわからない」
手を伸ばして、茂庭が千佳の手の甲に触れようとする。その動きを目の端に捉えると、千佳はゆっくりと手を引いた。
「ダメよ。優貴には正直でいたいの。遠距離恋愛をすることになったとき、もう優貴に隠し事はしないって、わたしは自分で決めたから」
はっきりと口にしたことでわかってくれたのか、茂庭は深いため息をついた。
「集まったわ！」
二人の間に漂う微妙な空気に気付かず、北川が嬉しそうな声で話しかけながら千佳の隣に座る。

「いつ行きます？」
「……今から」
茂庭はその言葉どおり立ち上がると、千佳を見下ろした。
これでもう終わり、本当に全て終わりだね――と告げるように、彼は苦しげに目を細め、千佳を見つめ続ける。北川の手が茂庭の袖に触れるとその呪縛は解け、二人は千佳に背を向けて歩き出した。
一人きりになると、千佳は安堵を覚えて深いため息をついた。だが、周囲に誰もいなくなると今度は離愁が湧き起こってくる。
千佳を想ってくれた人が去っていく。温もりを失ったような物悲しい気分だったが、友達なら新たな道へと進み始めた茂庭を応援するべきだろう。千佳の心が優貴にあると知り、自分の気持ちを心の奥に閉じ込めて千佳の背を押してくれたように、千佳も友達として茂庭を応援するべきなのだ。
茂庭が大広間から出てその姿が見えなくなるまで、千佳は彼の想いに応えられないことを何度も心の中で謝り、そして新たな道に向かう彼の背中にエールを送り続けた。
「あの、鈴木さん？」
いきなり声をかけられて、千佳は大広間の入り口から視線を動かした。目の前に、面識のない男性が座っている。

「良かったら、このあと飲みにいかない？」
千佳は、目をぱちくりさせて目の前の男性を見つめた。
これって、もしかして……誘われてるの？
そう思った瞬間、千佳の心臓が急に不規則なリズムで鼓動し始めた。咄嗟に彼から視線を外すと、今度は遠くの方から千佳を窺うように見つめている男性と目が合う。腰を浮かせて、こちらに近寄ってこようとする男性もいた。
こんな風に、いきなりいろいろな男性から注目を受けるはずがない。そう思うのに、男性の目が鋭い槍となって、千佳の躯を突き刺すように襲ってくる。
「ご、ごめんなさい！　わたし、ちょっと具合が悪くて……」
こんな経験を一度もしたことがない千佳は、半纏とポーチを持つと慌てて立ち上がった。彼らの目の届かないところへ逃げるためには、大広間から出るしかない。上司たちは、カラオケに行こうと熱心に話をしているし、先輩たちの中には既に席を外している人もいる。これなら、千佳が抜け出しても誰も気にしないだろう。
一度も後ろを振り返らず、千佳は急いで大広間から飛び出した。エレベーターに乗る時間も惜しく、別館へ続く階段に足に向ける。
「えっと、鈴木さん？」
後ろから、また男性に声をかけられる。怖くなった千佳は、聞こえなかったふりをして、自室のある五階ではなく、三階に行き、脱兎の如く廊下を走った。

お酒を飲みすぎて気分が悪くなった人や、温泉に入って逆上せた人向けに設けられた特別部屋がある。とにかくどこかに隠れようと、千佳はそこの引き戸を開けてスリッパを脱ぎ、ドアを開けて室内に入ると、ゆっくりと閉めた。自分の名を呼ぶ声が遠くなっていくまで、口を手で覆ってジッと息をひそめる。だが、千佳の意識は突然室内へ向いた。
何かが千佳を引きつける。生地が擦れる音、押し殺した息遣い、くちゅくちゅという聞き慣れた粘膜音。一瞬にして、千佳の顔は真っ赤になった。
今、この半分閉まった障子の向こうで……誰かが愛し合ってる！
「ダメ……もう、イ、クッ！」
「まだだ。……もう少し、我慢しろ」
女性の口から漏れる吐息が、すすり泣きに変わる。湿り気を帯びた肌と肌とがぶつかり合う音に混じって、激しさを増す粘膜の音。
この場所にいて、最後まで聞くなんて耐えられない。クライマックスに向かっているようなので、入ったときと同じようにこっそりと出ていけば、室内の二人に気付かれることはないだろう。
千佳はドアを小さく開け、物音を立てないように外へ出ると、ゆっくりと閉め、逃げるようにそこから飛び出した。

「どこに行ったんだろう、鈴木さん」
またも自分の名が廊下の向こうから聞こえてきて、千佳は泣きそうになった。
どうして追いかけてくるの？　何故放っておいてくれないのよ！
心の中で悲鳴を上げながら、千佳は何度も周囲を見回し、小走りで廊下を進んだ。
こうなったら、割り当てられた自分の部屋に戻るしかない。
千佳は三階から五階へ階段を駆け上がり、〝蓮の間〟へ続く長い廊下を走った。だが、自分の部屋の前で一人の男性がドアを見つめ佇んでいるのに気付き、千佳の足がピタッと止まる。その男性は千佳の名を呼んではいない。だが、千佳はその男性が振り返るよりも早く身を翻した。
今度こそ、千佳の目から涙が零れた。
日本酒を飲みすぎたせいで気分が昂ぶっているのよ――と自分に言い聞かせながら、千佳は上司数人にしか割り当てられていないスペシャルスイートへ続く廊下へ逃げた。こちら側の廊下に千佳がいるとは、誰も思わないだろう。
さらに奥へ進むと、部屋が広くなったことを示すように、小石の上に架けられた小さな太鼓橋の間隔があいていく。さきほどまで千佳がいた廊下とは違って、人の気配が全くしない。ここでしばらく隠れていれば安全だろう。肩で息をしながら壁にもたれてジッとしていると、静かな廊下にスリッパで歩く音が響いてきた。

「もう、イヤ！」
悲痛な声が、千佳の口から漏れる。こんなことになるのなら、茂庭や北川と一緒にいた方が安全だった。だが、そう思ってももう遅い。
一度後ろを振り返り、誰の姿もないことを確認してから、千佳は走り出した。周囲に目を配る余裕なんて全くない。もう一度振り返って誰の姿も目に入らないことを確認し、スペシャルスイートの一室の前を通り過ぎようとした……まさにそのときだった。
いきなり誰かに腕をきつく掴まれた。恐怖から甲高い悲鳴を上げそうになる。だが、腕を掴んだ人物を見て、悲鳴は喉の奥に掻き消えた。
ここにいるはずのない人が、目の前にいる。問いかけるように、だが同時に情熱を燻らせて千佳を見つめるその瞳。何も言えず、千佳は泣きながら彼の胸に飛び込んだ。
「……っ、優貴！」
身を投げ出すようにした千佳を、優貴はしっかりと抱きしめてくれた。彼の温もり、彼が愛用している香水の匂いに、またも涙が込み上げてくる。
いきなり取り乱してしまったから、優貴はいったい何があったんだろうと思っているに違いない。にもかかわらず、優しく千佳を抱いて「部屋へ入ろう」と囁いてくれた。優貴の言葉に頷くと、千佳は彼に促されるまま開けっ放しになっている目の前の部屋に入った。

千佳が泊まる〝蓮の間〟とは比べ物にならないぐらい広く、使われている家具の材質も見ただけで違うとわかるほど豪華だった。

いつもの千佳なら、そういうものに目移りしているはずなのに、今は目もくれず、優貴に抱きついたまま離れようとしない。彼の腕に抱きしめられることで、ようやく安心することができたからだ。

誰も助けてくれないと思っていたのに、ここにいるはずのない優貴がパニックに陥った千佳を助けてくれた。

黙って千佳を抱きしめてくれることに感謝しながら、千佳はゆっくりと優貴から身を離した。鼻をすすり、そっと面を上げて優貴の顔を仰ぎ見る。

「どうして……、ここにいるの？　東京にいるんじゃなかったの？」

「千佳が東京からすぐのところにいるのに、どうして行かずにいられるんだ？」

優しい笑みを投げかけてくる優貴。優しくされたいけれど、それ以上に激しく求めてほしいという欲求が込み上げてくる。交感神経を刺激するアドレナリンが放出されているのか、千佳はいつにも増して、大胆に躯を押しつけた。

全てを奪って――と誘うように、千佳は背伸びをして彼の首に手を回し、そっと自分の方へと引き寄せた。千佳の求めに応じて、優貴の唇が下りてくる。優しく啄むようにキスをしたかと思えば、彼は急に呻き声を漏らした。千佳の唇を割って舌を滑り込ませ

ると、何かを伝えるように、彼の熱いねっとりとした舌が口腔で動き回る。二人の舌が絡まり合った瞬間、千佳の躯がブルッと震えた。期待するように下腹部が熱くなり、秘部が勝手に戦慄き始める。

「つぁ……」

喘ぎ声が優貴の口腔に吸い込まれると、彼は深いキスをやめて、千佳のぷっくりと膨らんだ唇に舌を這わせた。

「……どうして、逃げてた？　何が千佳を怖がらせたんだ？」

そのときのことを思い出すと、また脅えに似た震えが走った。優貴の温もりに包まれて安心したくなり、千佳は彼の胸元にそっと顔を埋める。

「千佳？」

優貴が答えを促してくる。千佳は彼の腕に抱かれながら、真実を話すべきかどうか迷っていた。もし話したら、自意識過剰もいいところだと笑われるかもしれない。千佳でさえ信じられないことが起こったのだから。

「……正直に答えるんだ。何かに脅えている千佳を、俺が放っておくと思っているのか？」

優貴は理由を聞くまで決して諦めないだろう。本気で知りたいと思ったことを、彼はあいまいなままにしたりはしない。

千佳は観念すると、笑われるのを覚悟してゆっくりと口を開いた。

「会社ではわたしなんて見向きもしなかった人たちが、何故かいきなりわたしに声をかけてくるの。しかも、あとを追いかけてくる人もいれば、部屋の前に立ってる人もいたわ。皆、頭がどうにかなってしまったみたいに！」

優貴に肩を掴まれ、そっと後ろに押された。二人の間に隙間ができる。優貴が身を屈めて千佳の顔や首、胸元を舐めるように見つめた。そして、長い吐息を一つ。

「……そうされても仕方ないだろう。今日の千佳は」

そこで言葉を止めると、優貴は千佳の顎を指で挟んで顔を上げるように促す。

「とても……艶っぽい。まるで、早く俺に愛されたいと興奮しているときのようだ」

「それは！」

優貴の前にいるから、深い繋がりを求めるようなキスをされたから――とは言えず、千佳は口籠もった。

「キスをしたとき、酒の味がした。きっと、そのせいだろう……クソッ！」

いつもの優貴らしい感情の吐露に、千佳はホッと息をついた。ヨリを戻してから優貴は感情を爆発させないようにしていたけれど、こうやって時々表に出してくれる方が優貴らしい。

（意外とわたしはMだったのかもしれない）

忍び笑いをすると、肩から少しだけ力が抜けた。動揺が静まってから、千佳はやっと

部屋を見回した。

「わあ！」

大きなダブルベッド、十六畳ほどの和室、さらに応接セットの他にダイニングテーブルまである。一面のガラス窓の向こうには、五人は入れそうな大きな露天風呂。ほのかなランタンの明かりが、とてもロマンティックだった。

千佳の視線を目で追ったのだろう。優貴が背中から抱きしめてきて、そっと耳元で囁いた。

「一緒に入るか？」

昔の千佳なら、恥ずかしがっていたかもしれない。だが、優貴の愛を再びこの身で受け止めるようになってから、千佳はこれまで以上に彼と会える日を大切にしたいと思うようになっていた。離れているからこそ時間を無駄にせず、欲望をぶつけ合いたいと。

チラッと和室へ視線を向けると、壁掛け時計が目に入る。時刻は、二十二時を少し過ぎたところだった。そこで、千佳はハッと気付いた。

もしかして、付き合い始めてからずっと夢見てきた日を優貴と過ごせる？

優貴と一緒に明日二十二日を迎えられると思うと、心臓が早鐘を打ち始めた。千佳は勢いよく振り返って、優貴を仰ぎ見る。

「どうする？」

「入るわ。入りたい……、優貴と一緒に」

彼を誘惑しようとしていると伝えるように、上目遣いに見る。すると、優貴は千佳にもわかるほどブルッと震えた。上手くいったのかはわからないが、手を伸ばして彼の浴衣の帯をゆっくり解き始める。生地の擦れる音が静かな部屋に響く。浴衣の袷に手を添えて、滑るように下へ落とした。浴衣の下はボクサーパンツ一枚だった。彼の大切な部分は、既に生地を押し上げるほど大きく膨らんでいる。

千佳と同じように、優貴も興奮している。はっきりと反応が見て取れるその象徴を見ながら、千佳は生唾をゴクッと呑み込んだ。激しく高鳴る鼓動を感じながら彼のパンツに手を伸ばし、ゆっくりと引きずり下ろす。千佳の目の前で、彼自身が勢いよく跳ね返って揺れた。赤黒く充血した彼のモノに頬を染めながら足首までパンツを下ろすと、優貴はすぐにそれを蹴って脱ぎ捨てた。

千佳を見つめながら、今度は優貴が彼女の浴衣に手を伸ばす。

「次は千佳の番だ」

千佳は、自分がリボンと包装紙に包まれたプレゼントのような気分になった。優貴は、恭しく帯という名のリボンを解き、浴衣という名の包装紙をゆっくり開けていく。ブラジャーとパンティだけしか身に付けていないその肢体が晒されると、彼は目を輝かせ、息を呑んだ。

立ち読みサンプルは
ここまで

室内は暖房が効いていて、寒さは全く感じないというのに、ブラジャーの下にある千佳の乳首は既に痛いほど張り詰めている。

お願い、早く外して……

その懇願が届いたのか、優貴は膝をついて千佳の素肌を撫で上げながらブラジャーのホックを外し、それを放り投げた。優貴と付き合うようになって少しだけ乳房に膨らみが増したものの、それでもまだ少女のように小さい。だが、ひとたび優貴が触れれば敏感に反応してしまう。

「……っぁ」

優貴が、千佳の腰に両腕を回してきた。そのまま胸に顔を寄せたかと思うと、硬く尖った乳首を口に含む。舌を巧みに動かして乳首を刺激し、ぴちゅぴちゅと音を立てて舐め始めた。千佳の息遣いが激しくなっても、その愛撫をやめない。優貴の肩をしっかりと掴むものの、躯の芯に走る甘い電流のせいで足が震える。さらに下腹部の奥がざわざわし始め、秘部がしっとりと濡れてくるのがわかった。

「ゆう、きっ！　わたし……もう、立っていられない！」

「俺のために耐えてくれ」

そう言われると、何が何でも優貴の願いを叶えてあげたくなる。早く一つになりたい気持ちもあったが、彼のしたいようにさせてあげたいという思いの方が強かった。